

金網集抄出の当体義抄について

中 條 曉 秀

(一) はじめに

日向(一二五三〜一三一四)が宗祖の法門を記述したといわれる金網集には、宗祖の遺文と共通する文がかなり散見される。⁽¹⁾ 主たるものを挙げると、例えば『法華真言勝劣事』及び『真言見聞』が金網集の「真言宗見聞」と、『本門戒体抄』が金網集の「小乘三宗見聞」と、全面的に共通する。そして、これら三遺文は親撰ではなく、金網集を底本として作成された遺文である、と見なして良い。その他、類似乃至一部分共通のものは数多くあり、宗祖滅後の上代には金網集と基盤を共通する典籍が数点ある。⁽²⁾

さて、『日蓮宗々学全書』(第一三・一四卷)所収の金網集全十四帖を通観して喫驚することは、日蓮教学では一般に最澄が尊重活用した真如隨緣論、及び中古天台式の当体蓮華の法門はない、と踏んでいる、にもかかわらず、第七の「禅見聞」の《禅宗理体事》中の末に《当体蓮華事》が、第十三の付録の「理具之事」中に《隨緣真如不變真如事》の項がたてられていることである。⁽³⁾ なお真如隨緣論の問題については、立正大学日蓮教学研究所長の浅井円道博士が「宗祖における觀念論打破の思想」(二五一〜一六六頁『日蓮教学の諸問題』所収)中に詳述されており、ここで控えさせていただくこととする。よって、今は金網集《当体蓮華事》抄出で、中古天台式の当体蓮華の法門を説

金網集抄出の当体義抄について(中條)

金網集抄出の当体義抄について(中條)

き、古来から真偽に辯證のある最遊房あて御書十二篇の一つである『当体義抄』について、(a)金網集との共通部分、(b)引用経論釈の問題、の二点について少しく検討するものである。

(二) 金網集の「禅見聞」と『当体義抄』

——「禅見聞」の内容項目——

身延四世日善(二二七五—一三四六)の筆(a)になる金網集第七「禅見聞」の内容項目は左の表(一)の通り。

表(一)

(宗全一四卷の頁数)

第七卷 禅見聞

1、祖師事

二八九

2、禅宗立三種十種禅事

二八九

付 法蔵人之事

二九〇

止観 壇経 血脉譜

3、二十八祖付法之会通並重難事

二九二

4、禅宗名字事

二九三

5、破教外別伝事

二九四

付 宗門高祖達磨専経事

6、無説不説一字事

二九八

7、	禪祖師頌筆等事	三〇六
8、	南北二種禪事	三一〇
9、	六塵等經事	三一三
10、	禪宗理体事	三一五
	釈論真如平等之權説禪徒偏執事	
	付 釈論偽論事	三二六
	広示三理具觀法一破二但觀無教偏空断 無邪執一	
	玄義大綱 境智行三妙事	三一七
	付 華嚴真言等盜天台一念三 千事 聖密房抄	三二一
	以三有相即無相一破二但觀無教一	三二六
	觀心教行枢機事	三二七
	総在一念別分色心一念三千事	三三一
	鏡像円融譬 如意珠譬	
	海水譬	
	体内体外権実不同事	三三八
	金網集抄出の当体義抄について(中條)	

金網集抄出の当体義抄について(中條)

性相二空事 三四〇

付 一大事因縁即円融三諦事 三四一

当体蓮華事 三四三

奥書 三四八

— 遺文との共通部分 —

「禪見聞」と宗祖遺文との関連については、表(Ⅱ)の(イ)にいう『聖愚問答抄』(下)と『聖密房御書』、それに(ロ)に示したごとく先にいう「当体蓮華事」からの抄出の『当体義抄』等に共通する部分が見られる。

表(Ⅱ)

金網集「禪見聞」と遺文と共通する部分

(イ)

(金網集)

・宗全一四卷 二九四〜二九五頁

同 二九六頁

・同 三二一〜三二二頁

(遺文)

『聖愚問答抄』

同 三七一〜三七二頁

『聖密房御書』 八二二〜八二四頁

(ロ)

金網集「禪宗理体事」∧当体蓮華事∨

宗全一四卷 三四四頁

『当体義抄』

定遺 七五七〜七五八頁

本有常住也、覺不覺無明法性左右也、是意修多羅了義⁽¹⁾

經云、一切衆生無始幻無明、皆從如來円覺心建立云云、

如來無明法性無住一体実理証故、無明即法性無明無住

所、法性即無明法性無住所、無明与法性全体一而二也、

二而一也、止観云、無明癡惑本是法性以癡迷故法性變作

無明云云、妙樂云、⁽³⁾理性無体全依無明、無明無体全依法

性積、積論且置之、正如來金言華嚴經云、⁽⁴⁾心仏及衆生是

三無差別、文在爾前、意法華經物也、

..... (中略)

宗全一四卷 三四五頁

⁽⁵⁾大論云、明与無明無異無別、如是知者是名中道云云、⁽⁶⁾南

岳云心体具足染淨二性、性無異相一味平等云云、華嚴說

是三世無差別、法華經宣諸法実相、

..... (中略)

金網集抄出の当体義抄について (中條)

如是得意者 捨惡迷無明善悟法性可為本也。大円覺修多⁽¹⁾

羅了義經云 一切諸衆生無始幻無明皆從諸如來円覺心建

立云云。天台大師止観云 無明癡惑本是法性。以癡迷故

法性變作無明云云。⁽³⁾妙樂大師積云 理性無体全依無明。

無明無体全依法性云云。無明所斷迷 法性所証理也。何

体一也云乎云不審以此等文義可得意也。大論九十五夢譬

天台一家玉譬誠面白思也。正無明法性其体一也云証擲法

華經云 是法住法位世間相常住云云。⁽⁵⁾大論云 明与無明

無異無別。如是知者是名中道云云。但真如妙理有染淨二

法云事証文雖多之華嚴經云 心仏及衆生是三無差別文与

法華經諸法実相文不可過也。⁽⁶⁾南岳大師云 心体具足染淨

二法而無異相一味平等云云。又明鏡譬真実一二也。委如

大乘止観積。又能積籤六云三千在理同名無明三千果成威

称常樂三千無改無明即明。三千並常俱体俱用文。此積分

明也。⁽⁷⁾問一切衆生皆悉妙法蓮華經当体者如我等愚癡闇鈍

凡夫即妙法当体也乎。答当世諸人雖多之不出二人。謂權

宗全一四卷 三四六〜三四七頁
 問云一切衆生十界依正二報、妙法蓮華当体、闕鈍愚癡我等凡夫、日本國中諸宗悉妙法蓮華当体、皆可成仏乎、答云、当世日本國道俗四輩雖多之、不出二類、謂一權教之人、二実教之族也、而信權教方便真言念仏禪律等人、不可云妙法蓮華当体、信法華經人、即当体蓮華也、⁽⁸⁾涅槃經云、一切衆生信大乘故名大乘衆生云云、⁽⁹⁾精進經云、同共一法身、清淨妙無比云云、⁽¹⁰⁾南岳大師云修行法華經者、此一心一學衆莫普備、一時具足非次第入、亦如蓮華一華衆果一時具足、是名一乘衆生之義云云、此等文法華円頓同共当体妙法蓮華經、

教人実教人也。而信權教方便念仏等人不可云妙法蓮華当体。信実教法華經人即当体蓮華真如妙体是也。⁽⁸⁾涅槃經云一切衆生信大乘故名大乘衆生文。南岳大師四安樂行云⁽⁹⁾大強精進經云衆生与如来同共一法身清淨妙無比称妙法華經文。又云⁽¹⁰⁾修行法華經者此一心一學衆果普備一時具足非次第入。亦如蓮華一華衆果一時具足。是名一乘衆生之義文。

（中略）

定遺 七五九頁

所詮妙法蓮華当体者信法華經日蓮弟子檀那等父母所生肉身是也。南岳釈云一切衆生具足法身藏与仏一無有異。是故法華云 父母所生清淨常眼耳鼻舌身意亦復如是文。又云問云仏何經中説眼等諸根名為如来。答云大強精進經中衆生与如来同共一法身清淨妙無比称妙法蓮華經文。文雖有他經下文顯已通得引用也。

（注）——部分が共通するところで、……は類似と思われるところ。なお(5)・(8)・(9)は典拠不明である。

(三) 当体義抄の検討

梗概——

『当体義抄』(係年文永十年・日朝本)は十九番問答から成っている。その梗概は、一切の万有悉く妙法蓮華の当体であることを明かし、特に法華經を修行する日蓮の弟子檀那の当体こそ妙法蓮華經の仏である、という安心の極致を示したもので、中古天台式の観心色の濃い当体蓮華義で、『法華文義』の「蓮華釈」に説くそれと異なっているといふまでもない。⁽⁸⁾

——最蓮房の伝と十二篇の御書——

『当体義抄』の対合衆は最蓮房である。最蓮房は京の人で、天台の学僧。宗祖より先に何らかの原因で佐渡に流されていたようである。その佐渡で宗祖に値遇して弟子となり、日浄と号し、宗祖赦免後の建治元年に赦され、京あるいは身延に帰ったという。虚実入り雜り未詳の部分も多かったが、現今では実在の人物であることが定説となっている。⁽⁹⁾

ところで、昭和定本『日蓮聖人遺文』(全四卷)にしたがって、明らかに最蓮房あての御書と認められるものは、『生死一大事血脈抄』・『草木成仏口決』・『最蓮房御返事』・『得受職人功德法門抄』・『祈禱經送状』・『諸法実相抄』・『当体義抄』・『同送状』・『立正観抄』・『同送状』・『当体蓮華抄』・『十八円満抄』の十二篇である。そして、誠に奇異に思われることは、この十二篇中、真蹟の現存・曾存というものは一篇だになく、ただ『祈禱經送状』・『当体義抄』・『立正観抄』・『同送状』に抄出・抄写・古写本等が存するのみである。さらに他の門弟

金網集抄出の当体義抄について(中條)

金綱集抄出の当体義抄について（中條）

檀越に比して、短期間に相当量の遺文が集中していることも注目される。加えて、最蓮房あて御書はその題名を見ただけでも血脈・口決・当体蓮華等々中古天台色が色濃⁽¹⁰⁾い。誠に不思議な現象である。

——引用経論釈の検討——

宗祖の弘教の基本姿勢は折伏にある。したがって、その教学の大きな特色の一つに、充分に吟味された経論釈を援引して自説の援証とする文証主義がある。

しからば、今これらを踏まえて、一つの試みであるが、十九番問答から成る『当体義抄』には幸い経論釈が縦横に引用されている。よって、引用経論釈の吟味に問題を絞り、少しく検討するものである。本来ならばここで『当体義抄』中の引用経論釈について、その出典を含め具さに検討・対照すべきであろうが、紙巾の都合で省く。ただし、『当体義抄』中に引用される経論釈の出典名を挙げると、『法華経』・『大方広円覚修多羅了義経』・『無量義経』・『華嚴経』・『妙法蓮華経愛婆提舍』・『法華経安楽行義』、現在欠本ではあるが『注法華経』によって明白な南岳の『法華懺法』、『大宝積経論』・『金剛鉚』・『法華三昧懺儀』・『玄義』・『文句』・『止観』・『大乘止観法門』・『釈籤』・『弘決』・『文句記』・『法華伝記』・『守護国界章』・『註無量義経』等々の典籍が挙げられる。そして、これら引用経論釈の出典等の確認の出来るものは一応首肯してもいいと思うが、その確認の出来ぬものが幾つかある。よって、今それらを掲げ検討することとする。

(a) 大論云、明与^二無明^一無^レ異^レ無^レ別。如是知者^レ是名^レ中道^二云云。(定遺七五八頁)

この文は『大論』にはない。ただし、『大宝積経論』巻第三に全同の文が見られる。金綱集にも同文（——(5)参照）ありである。

『大智度論』にはこの文はない。しかし、この文と全同のものが『守護章』⁽¹⁶⁾中巻の中に「釈論云法譬並拳」とある。この場合『守護章』に引かれる『釈論』とは世親の『法華經論』のことであるが、古来から『釈論』といえ一般に『大論』のことを指す場合が多いため、『守護章』にいう『釈論』を『大論』と誤り伝えたものであろうとも考えられる。ところが、この文の次下に今いう「釈論云、法譬並拳」を含めて、『守護章』の文がかなりの紙面を割いて引用されているのを見る。とすると、『守護章』の本来の意としては、『妙法蓮華經憂婆提舍』（法華經論・釈論）を指すにもかかわらず、いかなる訳か、竜樹の『大智度論』からの引用であるとされるのである。しかも、念を入れて「竜樹菩薩大論云」とあると、手敵しいいい方になるうが、単なる書写段階でのミスであると片付けていいものか、『扶老』⁽¹⁷⁾の日好ならずとも疑問を抱かざるを得ない。

(f) 伝教大師、最後隨終、十生願記云、南無妙法蓮華經云云。（定遺七六七頁）

最澄の著といわれる『十生願記』に唱題の事例があったというのであるが、残念ながらこの書は現在一切不明である。

等々である。現在の写本段階にはかかる問題が残る。文証主義を標榜する宗祖の弘教の基本姿勢との懸隔は徴々であるとはいえぬように思う。

——真偽論——

古来から『当体義抄』の真偽説が如何に喧しかったかは、例えば現在欠本ではあるが、甘露院日泉の『当体義抄真偽弁』⁽¹⁸⁾と題する一書さえあるを見ても明らかである。殊に『扶老』の日好は、部分的には真撰なりと認めるものの、大部分は後人の添加になれるものとの意向で、その論旨を立証するために五ヶ条を掲げている。今その一部を紹介す

ると、「一ニ大強精進經、事不審……二ニ守護章、釈論、龍樹智論、云ヘルコト亦大疑シ」と述べている。なおこれらについては先に少しく触れたところである。

その一方、これらの疑難を一掃して、真撰説を主張する学者もある。近世日蓮宗学の大成者優陀那日輝は、その著『当体義抄略要』⁽²⁰⁾において、『扶老』の五大疑難に対して逐一論駁を加えて、真撰なることを力説しているのはその代表的なものであろう。

四 むすびに

如上の検討を踏まえて、金綱集「禅見聞」と『当体義抄』とについて、殊に興味深い教項を列挙しむすびとする。

まず、金綱集「禅見聞」と『当体義抄』の両者共通する引用経論積の中、その出典が極めて曖昧なるものが三点存在している。表(Ⅱ)の(ロ)の傍線(5)・(8)・(9)であるが、これら疑問三点は、日向から日善に至る間の書写上の誤りか、原本失錯が転移してそれに及んだものか、取意か、その当時から文獻は存していたものか、等々が考えられよう。なお傍線(9)の「精進経云云」の件など、『扶老』の指摘を待つまでもなく、一個の興味ある問題であろう。

次に、金綱集は信頼するに足る書であるからといって、その抄出のある『当体義抄』を真撰視することは当然出来ない。また、『法華真言勝劣事』・『本門戒体抄』等のように、金綱集を底本として成った遺文であるとはいえない。しかし、現時点の検討を以て云云するには聊か忸怩たるものがあるが、誤解を恐れず一步踏み込んでいえば、金綱集の文が『当体義抄』の原型となったと見られなくもない。いかがなものであろうか。

三に、『当体義抄』の抄出先であるともいえる△当体蓮華事▽についてであるが、表(Ⅰ)のごとく金綱集では

金綱集抄出の当体義抄について(中條)

金網集抄出の当体義抄について(中條)

△当体逆華事▽は、「法華經之事」(第十卷上・下)の部に属する法門ではなく、「禪見聞」の△禪宗理体事▽の項の、しかも、その九の細目の中の一細目であることに注意せねばならぬところであろう。所詮、日蓮教学の正系ではなく傍系に位置するものであろう。なおかかる法門が金網集に見えるということは、案の定、宗祖はご存知であったことを意味しよう。⁽²¹⁾

以上、論すべき多くの点を残すが、紙巾の都合上省略し、後日を期したく思う。

- (1) 拙稿「金網集の一考察」(四三八〜四四〇頁『日蓮教団の諸問題』所収)を参照されたい。
- (2) 金網集の「真言宗見聞」と『法華真言勝劣事』・『真言見聞』の二書との関連については、身延山短期大学、長宮崎英修博士が『不受不施派の源流と展開』(三九〜四三頁)に詳述され、浅井円道先生は金網集の「真言宗見聞」を論の中心に据えて、宗祖遺文・金網集・『法華問答正義抄』の真言批判の素材についての対比を「金網集と法華問答正義抄」(四八〜六六頁『大崎学報』一三五号所収)に論究されている。
- (3) 前掲拙稿四四二〜四五〇頁を参照されたい。
- (4) 前掲拙稿四四〇頁を参照されたい。
- (5) 浅井円道氏前掲稿四六〜四七頁を参照されたい。なお「ない」とは強い表現であって、実際は宗祖にあっては、かかる知識は所有されていたが、おそらく意識的にであろうが、自己の教学に用いることはなるべく避けられた、と言うべきであろう。いうまでもなくこれらの法門が存在したとしても、所詮正系の日蓮教学とはいいい難く、傍系に位置するものである。
- (6) 宗全一四卷(三四八頁)の「奥書」と「編者云」を参照されたい。内容項目については、宗全一四卷冒頭の「金網集条目」にしたがった。なお日善の伝等については『日蓮宗事典』六一九〜六二〇頁を往見されたい。
- (7) それぞれの遺文の脚注部分にその同異についての指摘がなされている。
- (8) 『日蓮聖人遺文辞典(歴史篇)』七九九頁、『日蓮宗事典』二八一頁を参照されたい。
- (9) 拙稿「最蓮房あて御書の一考察」(九一〜九三頁『棲神』五三号所収)を参照されたい。
- (10) 前掲拙稿「最蓮房あて御書の一考察」九三〜九六頁を参照されたい。

- (11) 大正藏經二六卷二二八頁(下)
- (12) 大正藏經四六卷六九九頁(下)に「大強精進經」とあり、七〇〇頁(上)に「衆生与如来。同共一法身。清淨無比。称妙法華經」とある。
- (13) 『日蓮聖人御遺文講義』八卷(二七一頁・二八三頁)、『日蓮聖人遺文全集講義』一二卷(二七一頁)と、『録内啓蒙』下巻(五〇九頁(下))、『日蓮宗全書』所収)、『録内拾遺』(二六八―二六九頁『日蓮宗全書』所収)を参照されたい。
- (14) 註(19)参照。
- (15) 伝全二巻三九八頁、『法華去惑』(伝全二巻五六頁)にも同文がある。今は『守護章』を以て代表とする。なお宗祖の遺文に『法華去惑』からの引文がないのは、『守護章』中巻と同文である為であらう。
- (16) 註(15)参照。
- (17) 註(19)参照。
- (18) 『日蓮宗々学章疏目錄』二四五頁参照。
- (19) 『録内扶老』(六四六頁『日蓮宗全書』所収)を参照されたい。
- (20) 『充治園全集』二篇(四七一―四九〇頁)を参照されたい。
- (21) 註(5)参照。

なお『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『大正新脩大藏經』は大正藏經、『伝教大師全集』は伝全、とそれぞれ略称した。